

《 ロマンズ諸語初出文献紹介 》

スペイン語の最古文献

原 誠

筆者個人にとってはこのようなタイトルでスペイン語における初出文献の紹介をおこなうことはあまり楽しい仕事ではない。その理由はひとえに筆者が大変アクの強い人間だということにある。つまり筆者は何かものを書くとなると、つねに実証的データに基づいて自分の考えを述べたいという欲望が強いのである。ところが今般筆者に課せられたこの仕事は、スペインからはるかかなたの東洋の島国日本においては実証的データなどとうてい望むべくもなく、しかもスペイン人文献学者たちによってかなりの程度まで開拓されていて、言わば日本人イスパニタスがつけ入る余地のない、と言うよりもむしろつけ入るべきでない分野なのである。そのような分野について筆者独自の考えなど思い浮かぶはずがない。それではこの原稿を仕上げるのをお断わりするかということになるが、そうもいくまい。

つまり他方ではこのようなロマンス語学会ではロマンス諸語相互間の比較という仕事は大変重要であり、ロマンス諸語の各々から最古文献の紹介をおこなって、比較し合うということにも充分意義があると考えられるからである。

けっきょくここで筆者は何を言いたかったかという点、以上のような理由で、筆者は以下において堂々と ES (ESPAÑA CULTURAL) の Núm. 90 (1977年12月1日発行) の記事と Ramón Menéndez Pidal の *Orígenes del español* の関係部分とを孫引きせざるをえないということである。

前者、つまり ES の方には本件に関係ある見出しが三つあって、まず最初が

「普遍的な一言語へ向けて

お祈りの文句のオリジナル」

となっており、第2番目は

「カスティーヤ語の最初の証拠」

であり、最後は

「スペイン国王夫妻、ラ・リオハ地方のサン・ミヤン・デ・ラ・コゴージャにてカスティーヤ語成立千年祭記念式典を主宰。

25 か国の大使、同式典にてドン・フワン・カルロスとドーナ・ソフィーヤに随伴」と題されている。

説明のつごう上、第2の見出しの部分から紹介すると、そもそもカスティーヤ語の最古の文献というのは「サン・ミヤンの注記」と呼ばれている書き込みである。つまり当時のサン・ミヤン・デ・ラ・コゴージャ村のスーツ修道院の修士たちは、現在ふつうに「古典ラテン語」と呼ばれている言語を100%は理解できなくなっていたのであろう、彼らが日常話している口語(=原初カスティーヤ語)によって彼らにとって不可解な単語に注記をしているのである。たとえば *repente* とあると、これに *lueco* (= *luego*) と注記するといったふうに。

この貴重この上ない文献は、1913年中世学者ガルシーヤ・モレーノによって発表され、今日では歴史学アカデミーによって保管されている。当然のことながら、サン・ミヤン・デ・ラ・コゴージャのあるログローニョ県からはこの文献の同県への返還要求があるし、またかりにそ

れがかなわぬとしても、今回の千周年記念式典の時だけでも一時的に返還してもらえないだろうかという要請があったのだが、破損を恐れる歴史学アカデミー側の、かたくなとも言えるほどの拒否回答にあっている。

さてこの注記がいったいいつごろ書かれたかが問題だが、歴史学者メネデス・ビダールは977年だとしている。かりにこれが真実だとして、文献学者たちが異口同音に強調するのは、この古典ラテン語が文語としては万能であった時代に、一修道士がよくも当時の口語であったカスティーヤ語およびバスク語で書き込みをする勇気があったものだということである。ちなみにカスティーヤ語の発祥地はバスク語と境を接しており、したがってこの「サン・ミヤンの注記」にもバスク語による書き込みが3か所ばかり見受けられる。したがってかの有名なF->h->φという変化現象にバスク語の substratum を認める立場にも少なからぬ説得力があることになるというものだ。

ここでひとつ問題がある。はたしてスペイン語の最古文献と称するのに、このような古典ラテン語の単語に対する、カスティーヤ語ないしはバスク語による注記は充分であろうか？ それよりもむしろれっきとしたNPとVPとを有するS(文)の方が望ましいと考えるのは人情というものだろう。ところがじつは幸いなことに1か所だけそういう文の部分があるのである。

それがESの最初の見出しの下に引用されている部分である。本稿でもそれをここに引用しておこう。

Cono aiutorio de nuestro dueno, dueno Christo, dueno Salbatore, qual dueno get ena honore, e qual duenno tienet ela mandatione cono Patre, cono Spiritu Sancto, enos siéculos de los siéculos. Fácamos Deus omnípotes tal serbitio fere ke denante ela sua face guadioso segamus. Amem.

以上「サン・ミヤンの注記」の72ページに見られる、43語から成る文である。これにはメネデス・ビダールによる現代語訳があるから、それに基づいた拙訳を披露しよう。

「われらの主、キリスト様、救世主様の御助力とともに。この主は栄光のうちにおわし、また何百年にもわたって天なる父、聖霊に^{たいし}御力をお持ちである。全能の神よ、あなた様の御前にてわれらが歓喜にひたれるような御業^{みわざ}をわれらにどうかたまえ。」

さて音声学的・文法的注釈はあと回しにして、第3の見出しの部分の紹介に移ろう。さきほど筆者は「ラ・リオール地方のサン・ミヤン・デ・ラ・コゴージャ村のスーツ修道院と書いたが、じつはこの「スーツ」には「上に」という意味があり、その反対語はyuso「下に」である。サン・ミヤン・デ・ラ・コゴージャには上・下二つの修道院があって、式典がおこなわれたのは「下の」修道院においてであった。この一帯はデマング山脈に背後を守られ、ナヘリーヤ川の流れる肥沃な溪谷地帯であって、かの有識階級文学の代表者とも呼ぶべきゴンサーロ・デ・ベルセーオはこの地方のことを「疲労困憊しきった人々のあこがれの地」とうたっている。この山奥の寒村に、国王夫妻のみならず、文部大臣、各省の局長たち、スペイン語圏25か国の大使たち、ユダヤ・スペイン語圏の代表者たち、バスク語圏の代表者たちまでが集まって来たのだから、そのにぎわいたるや想像を絶するものがあったであろう。

式典はサン・ミヤン・デ・ラ・コゴージャの村長の挨拶で始まり、彼は国王夫妻に向かって「スペインの文化と歴史とがこの一帯で生み出されていたあの当時(=10世紀)にわれわれ村民はおさえがたい郷愁をおぼえるが、その意味でも正義の原則に基づいて多くの問題を解

決せねばならないと述べた。

ついで国王は、スペイン国民、中南米のスペイン語民、フィリピンの人々を対象として以下のような挨拶をおこなった。

「この地で、いまから1000年も前に、われわれの言語による最初のことばが書かれたのです。ここサン・ミヤン・デ・ラ・コゴヤにおいて、われわれよりも1000年も前に生きていた一僧侶が、聖アウグスティヌスの文章に注釈を入れ、解説をしたのでした。しかもそれと同時に、彼の隣人たちと話をする際に用いた、まだ正式の名前もなかった言語で一文を草したのでした。その言語こそ、何百年にわたって「カスティーヤ語」と呼ばれてきた言語ですが、すでに16世紀において、この言語を母国語としながら、この地方的な呼称に満足しない一部スペイン人から抗議の声があがりはしましたが、いまだにこの呼称は人口にかいしゃされております。このロマンス語は、この地方でも1000年も前に分化しはじめましたが、まだカスティーヤ地方が誕生したばかりであり、その顕著な特徴を示していなかったので、本来の意味におけるカスティーヤ語とは言えませんでした。しかし時を経るにしたがい、そのロマンス語はカスティーヤ語化し、ついにはカスティーヤの片隅のみならず、カスティーヤ王国全域にひろがり、ひいては全スペインおよびその中南米植民地においても話されるにいたったのです。

ところがこの言語は一瞬たりとも孤立したことはありませんでした。つまりスペインのその他の諸言語と共存していたのです。この他ならぬ「サン・ミヤンの注記」の中にも最初のバスク語で書かれたいくつかの単語があります。カスティーヤ人とバスク人とはつねに歩みを共にしてきました。両者の歴史と功績は不可分であり、両者の言語もその揺籃時代から事実上まざりあっていました。カスティーヤ人とバスク人と歩みを共にした人々に、レオン人、ガリシヤ人、ナバーラ人、アラゴン人、それにのちになって再征服された新カスティーヤの住民、アンダルシーヤの人々がいます。いまアラゴン人が出ましたが、彼らと歩調を合わせた人々にカタルーニャ人、バレンシヤ人、バLEARレス諸島の人々、それにアラゴン王国の助力のもとアルフォンソ10世によってカスティーヤ領とされたムルシヤの住民がいます。そして最後に加わったのが、新世界へのさきがけとも言うべきカナリヤス諸島の人々です。

いまわれわれは人類の偉大な言語の一つの誕生を祝っております。この言語を話せば、お互い非常にあい異なる種族どうしが理解しあえますし、自分の考えを述べあうこともできます。しかもこの言語でもって遠隔の地相互間で兄弟愛が芽生えたのです。したがってこの言語は世界普遍的なのです。

いまや人類の偉大なる言語の一つの出現が祝われているのです。これによってわれわれは大きな責任を負わねばならないのです。すなわちまず第一に、われわれは、それを汚したり失なったりすることなく、しかも欲張りが自分の持ち物を大切にすることではなく、それを生み育て、実り多きものにするによってこの宝物を保存せねばならないのです。非常にスペイン語的な、話し方、ものの考え方、歴史の感じ方、歌い方、一言にして言えば、生き方は一朝一夕に成ったものではありません。それは何千人という人々とともに生き続けていますし、これからも生き続けることでしょう。

しかしこれに続いて第2の責任があります。それは相互理解と協調とを維持せねばならないというものです。いかなるスペイン語圏の諸国も孤立しては相互理解は成り立ちません。

私はスペイン国王として、またこの言語が発祥した国の代表者として、一国だけの領土、富、勢威にこだわらず、政治的国境の枠を乗り越えて、全スペイン語国民と連帯しているのを感じます。」

スペイン国王フワン・カルロスI世のこの挨拶の中に、もちろん「スペイン語＝カスティーヤ方言」という自負の念を感じないわけではないが、筆者としてはそれにもまして、独立の気運に燃えるバスク地方、カタルーニャ地方、ガリシヤ地方、アンダルシーヤ地方等への、国王としての心遣いおよび中南米スペイン語諸国への配慮を強く感じないわけにはいかない。

国王の挨拶のあとに続くのは、スペイン・ロイヤル・アカデミー会員アラルコス・ヨラー教授の講演である。彼は、私事にわたって恐縮だが、筆者の専門の方での商売仇であり、その昔オビエド大学文学部の自分の研究室で芽えな顔をしていたのと比べると、彼もずいぶん偉くなったものだと感慨無量である。彼はまずカスティーヤ語の産声とも言うべき「注記」の意味と内容に触れたあと、おおよそ以下のように述べた。

「私は連帯のための手段としてのスペイン語の性格を強調したいと思います。スペイン語はまさにスペイン人の共同生活のための手段であります。さらに進んで、昔の閉鎖的な考えを捨てて、世界一国家への構想を練る必要があると考えます。なぜならば、われわれの行動範囲はもはや鐘楼の上から見渡せる地上だとか飛行機から見える地上だとかいった狭い範囲に限られるのではなく、人工衛星から見た地球の全面積がまさにそれだからです。

スペイン語は相互理解のための一般的手段とならねばなりません。というのは、もしわれわれが方言という閉鎖的な隠れ家の中に引き籠っているならば、とうとう最後にはわれわれは英語か中国語かロシア語をしゃべらねばならぬことになるでしょうから。なるほど昔からスペインには方言も多く、また別の諸言語も話されています。そしてたしかにそれらは偉大であり、手厚く保護されねばなりません。だからと言って、スペイン語というこのコミュニケーションの手段の世界的展望を曇らせるようなことがあってはならないと思うのです。」

ここにはより露骨にカスティーヤ語の優位がうたわれているように筆者には思える。そしてこういったスペイン人の態度を少々傲慢不遜と感じると同時に、非常に羨しくも思うのである。なぜかと言うと、これほどまでに自分たちの母国語に誇りが持てるということはやはり偉大であると言わざるをえないからである。これに引き換え、わが日本国では、コマージュリズムに踊らされている面もあるにはあるが、幼児に対して早期に英語を教えている。日本語も充分マスターしていないのに、なにが英語かと筆者は言いたい。われわれ日本人にとって、日本語あってこそその英語であり、日本語あってこそそのスペイン語でなければならない。

ではいよいよ前掲のお祈りの文句の音声学的・文法的分析に移ろう。メネンデス・ピダールの *Orígenes del español* によると、このお祈りの文句にはラ・リオハ方言の影響が強くにじみ出ているとのことである。ラ・リオハ方言の影響が強くにじみ出ているということはすなわち、アラゴン方言の影響が強くにじみ出ているということである。そこでサモラ・ピセンテの *Dialectología española* によってラ・リオハ方言の特徴を以下に列記しておこう。なおサモラの本は現代のラ・リオハ方言の方言的特徴を扱っているのであり、ここでは10世紀のラ・リオハ方言の特徴を呈示すべきだという指摘がなされるかもしれないが、これはまさにそのとおりである。したがってここに引用するデータはあ

くまで参考資料でしかない。事実メネンデス・ピダールの指摘する当時の方言的特徴（後述）と現代のそれとは大いにはなれている。

yod の前でも二重母音化が起こる。

LY > λ

流音のあとでの無声子音の有声化。

「子音+L」という語頭子音群をそのまま保つ。

-NS- もそのままである。

-SC- は [x] または [ç] となる。

-K'L- > λ

F- > h- > φ

語末の無声母音は閉じる。

語頭の硬口蓋子音はそのまま保存される。

-MB- もそのまま保存される。

-D-, -G- > φ

-TR- の口蓋音化。

r の摩擦歯音化。

-NDR- > -nr-

内破の -r, -l の混同。

tú に対する肯定命令形における -de の残存。

直説法不完了過去形における -b- の残存。

比較級として mais のほかに plus を用いる。

所有形容詞 lur, lures の使用。

冠詞 lo の残存。

それでは次にいよいよお祈りの文句の音声学的・文法的分析に移ろう。

[1] cono

-n で終わる前置詞のあとでは冠詞 (ILLU > elo) の e > φ になる。また -n+l- > n という同化現象が起きる。似たような例として、このお祈りの文句の中に, enos sículos とか ena honore がある。

なお冠詞が前置詞とくっつかない時は完全形 ILLU > elo の形で現われる。同じような例をこのお祈りの文句の中に探すと, ela mandatione と denante ela sua face の二つがすぐ見つかる。

[2] aiutorio

末尾の -o はラテン語では -UM である。これが o に開いているのは複数の -os の影響である。しかしこれが -u のままで残っている例もなくはない。教養語の影響もこれにはある。ちなみに「シーロスの注記」では

-u : -o = 26 : 36

であり、「サン・ミヤンの注記」では -u は 1 例のみである。

次に aiutorio の -t- についてであるが、ラ・リオハではカスティーヤよりも有声子音の表記が少ない。どうやらラ・リオハ地方や、バスク国と境を接する全ナバーラ地方

には高地アラゴンと同じく、子音の有声化を嫌う傾向があったらしい。

[3] nuestro

二重母音 ue は「サン・ミヤンの注記」に多い。ua もなくはないが、-o に開いている。

[4] dueno

ここでも -o に開いている。なお可能性としては -o > ∅ となって duen になることもありうる。

-n- (<M'N) について。その次に duenno という形が出ている。この -nn- はおそらくもう口蓋化した子音で発音されていたのだろう。もしこれが正しいとすれば、これは yod の前でも二重母音化が起きるというりっぱな証拠となる。このことから推測すると、-n- は [n] で発音されていたと考えられる。おそらく当時のラ・リオハ地方には ['dwe-no] という発音と、 ['dweɲo] という発音とが共存していたのだろう。これがカスティーヤ語風に変化していたとすると、いまごろは *duembre とか *dombre などという形が成立していたかもしれないなどと考えるのも楽しいことである。

[5] Salvatore

-e が残存している例である。「サン・ミヤンの注記」も「シーロスの注記」も -e を規則的に残している。あとの honore も同様である。qual, tal に対して、「シーロスの注記」には quale という形すらある。要するに10世紀後半には -e > ∅ はまれであったということである。

-t- が無声のままであるという点についてはすでに [2] で触れたが、あとの siéculos, padre, faca といった形とあわせ考えると、スペイン中央部の中世の文語では、無声子音の保存は、ラテン語の母音の音色や古典の動詞の形を尊重する癖よりも根強かったことを知ることができる。これが11世紀になると有声化が支配的になる。

-b- と -v- との混同にも注目すべきである。あとに出る serbitio の -b- についても同様である。

[6] qual

形容詞としては 'el + 名詞 + que' に相当する。したがって、この部分は 'el señor que está en honor, el señor que tiene el poderío' と言い換えられることになる。

[7] get

この g は [j] と発音されねばならない。これは俗ラテン語の時代からの伝統である。EST から派生した表記には、この get のほか、jēt, iet, ie などがあり、中には不定詞は gerrare, 活用形は jerras などという不揃いなものまでであるが、とにかくこの表記法、現在のアラゴン方言にまでずっと受け継がれているのである。

[8] ena

これについてはすでに [1] で触れた。

[9] honore

-e を保存している例であることはすでに [5] で述べた。当時は女性名詞であったことは [8] の ena から知れる。

[10] duenno

[4] を参照されたい。

[11] tienet

これはナバーラ・アラゴン方言の例である。すなわち「サン・ミヤンの注記」では規則的に *ie* と二重母音化している。*-t* は「注記」の中に出るラ・リオハ方言では保存されるのが原則であり、*-t > ø* の例はわずか三つしかない。そのうちの一つが [18] で出る *fácanos* である。なぜ *-t > ø* になったかと言うと、それは *clitic* の *nos* がついているからとのことである。

[12] *ela*

この語の冒頭は *i-* がふつうであるが、ときには *e-* と書かれることがある。[1] を参照のこと。*ela, ellos* という形はその後も残存し、12世紀までは確認できている。

この *ela* の *-l-* の部分について述べるならば、ふつうここには口蓋化した *-ll-* が現われるはずであるが、それが *-e-* のままとするのはこの語が無強勢だからである。このことは *Orígenes* ではなく、同じくメネデス・ビダールの *Manual de gramática histórica española* の方に書かれている。

[13] *mandatione*

-ti- の部分がこのころどのように発音されていたかは大変むずかしい問題である。あとに出る *serbitio* の *-ti-* と *face* の *-c-* についても同様である。

-e の残存に注目すべきであろう。

[14] *Patre*

-t- が無声のままである。[5] を参照のこと。

[15] *Spíritu*

Sp- の前にもう現在の *espíritu* に見られる *e-* が現われて来ていたかどうかはむずかしい問題である。

最後の *-uo* [2] でも述べたが、この *-u* にはおそらく *Spíritu* が教養語であることが大いに影響していると考えられる。

[16] *enos*

1 の *n* への同化の例として、*IN-(I)LLA > enna* が出ているから、この *enos* もこれと類似の変化を受けただと考えてよからう。もちろん *elos* という形もある。[12] 参照。なお *-nn-* が *-n-* となっているのはやはり無強勢のせいと考えられている。

ただしその次の句 *de los siéculos* では *e-* が消えている。これは先行の前置詞が *de* であって、母音 *-e* で終わっているからであろう。

[17] *siéculos*

この形は *Orígenes* の中ではナバーラ・アラゴン方言の規則的な二重母音化の例として紹介されている。

ラ・リオハ方言の特徴として *-c-* が有声化していない点にももちろん注目せねばならないが、それよりも何よりも *-u-* が残存している点にわれわれの関心は向く。つまりこれはラテン語の強勢音節直後の音節の母音がしばしば保たれるということである。しかもこの *siéculos* のように比較的大衆的な語に伝統的・教養的な傾向が残存している点がとくに興味深い。それも一方では強勢音節の母音の二重母音化という大衆的な現象が起こっているのだから、よけいその感が深い。

この強勢音節直後の音節の母音は大部分10世紀には消えていたのであるが、実は11世紀まで残存していたケースもないわけではない。ただしこれはあくまでも表記の上でのことであって、この *-u-* が実際に発音されていたかどうかは保証のかぎりではない。

[18] fácanos

-t がついていない点についてはすでに [11] で述べた。-c- が有声化していない点についてもすでに [2] や [5] で -t- について触れられているが、この -c- についてはメネデス・ピダールは過剰訂正による無声の -g- であると述べている (§ 73₂)。

[19] omnípotes

少々教養的な単語ではあるが、-p- も -t- も無声のままである。しかし -NS- > -s- の変化はりっぱに起きている。

[20] fere

これは現在の hacer に相当する形であるが、-e が残存している。この残存は -ĚRE 動詞では非常にまれとのことである。

[21] delante

delante の古形。n と l とはいずれも歯茎音であるから、両者の交代が起こってもべつにふしぎではない。

[22] sua

性変化が残存していて、しかもその前に定冠詞が置かれている。

[23] gaudioso segamus

まず -o と -u との動揺に注目すべきであろう。そもそも「サン・ミヤンの注記」の中の -u- はすべて略号で書かれているので、音価が o なのか u なのかわからないというのが定説になっているが、「シーロスの注記」の助けを借りて判断すると、[u] 説の方が優勢のようである。なぜ gaudiosos と -s がつかないのだろう？

segamus の -g- の発音はもちろん [j] である。

以上で例のお祈りの文句の音声学的・文法的分析を終了した。この分析の直前に、サモエラの著書による現代のラ・リオハ方言の特徴を列記しておいたが、こんどはそれとの比較の意味で、メネデス・ピダールの Orígenes の中から当時のラ・リオハ方言の中のナペーラ・アラゴンの特徴を紹介しておく。案の定、二つか三つの特徴はさすがに両者で一致している。

二重母音化に動揺あり。

uamne, uemne (=hombre)

C' L > λ

spillo (=espejo)

ch の代わりに to

muito, feito

語頭の G の保存。

geitat (=echa)

PL, CL, FL の保存。

aplecare, aflarat (=hallará)

動詞 ser の活用形。

Tú ies, Él iet

NT > nd

alquandas

M'Nそのまま保存。

uemne (=hombre)

母音間無声破裂音の保持。

ajutorio, faca (=haga), lueco, siéculos (=siglos)

ここまで音声学的・文法的分析をやって来た結果、筆者としてはこれではたしてカスティーヤ語の最古文献と言えるのかどうか疑わしくなってしまった。実体はナバーラ・アラゴン方言の影響を強く受けたラ・リオハ方言ではなからうか。

本稿はここで終わっても当然なのだが、じつは ES の Núm. 91 (1977年12月15日発行) — つまりカスティーヤ語成立千年祭を報じた ES の Núm. 90 の次の号ということになるが — に少々気になる記事があるのでそれを最後に紹介しておく。

「カスティーヤ語成立千年祭が始まって数週間を経て、レオンの大寺院の博物館がおそらくは 959 年のものと思われるロマンス語の文書を公開した。ということは、これまでカスティーヤ語で書かれた最初のテキストであると考えられてきた「サン・ミヤンの注記」よりも18年前に書かれたということになる。

この文書は第 852 号と番号がふってあり、タテ 19 cm, ヨコ 26 cm の羊皮紙に書かれ、ビシゴード王エルメネヒルドとその妃シータがサン・フスト・イ・バストール修道院におこなった奉納のことがラテン語で書かれている。しかしその真の値打ちは、専門家の研究によると同じ日に書かれた右ページにある。そこにはすでにロマンス語で書かれたチーズについての説明がある。カスティーヤ語風の表現・言い回しも豊富なので、古文字学者や文献学者たちは、あるいはわれわれの言語で書かれた最初の文書になるかもしれないこれらの興味ある説明を深く研究しようという気を起こしている。

テキストの保存状態は良好なのだが、あるあまり優秀とは言えぬ研究者が取り扱ったために判読が困難である。じつを言うと、このチーズについての説明は 1919 年からその存在が知られており、同年古文字学者サカリーヤス・ガルシーヤ・ビヤダが「レオン大寺院古文書録」の中に発見し、カスティーヤ語の最古文献と折り紙をつけたものなのである。『「サン・ミヤンの注記」よりも古いカスティーヤ語最古の文献?』と題されたこの記事、その後の経過を筆者はまったく知らないのであるが、はたしてその結末はどうなったのだろうか?